夏について

一人文芸倶楽部
Tower117

詩

——夏は長い　けれど本当の真夏は束の間

結局　毎年
夏に魂を売り渡すしかないのだな

夏について

塔野夏子

そのはじまりからすでに
鋭く亡びに縁取られているのが夏で
青空と陽射しがどれほどあかるくても
そのあかるささえ不穏なのが夏で

蝉が鳴き騒いでも
祭の喧噪が渦巻いても
濃密な静寂が深々とまとわりついているのが夏で

だからもう　夏には何も考えない　というのは
あるいは正しいのかもしれない

夏はそれとしてひとつの結界だから
何処までも行けるようで
何処までも行き止まりで

夏はどうしようもなく身体を侵犯してくるから
私　あたし　僕　俺
一人称さえ定まらなくなるもので

五行歌

南野薔子

時折
勝ち気を閃かせる瞳と
はかない口もと
君の在る
夏景色

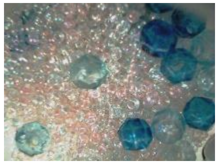
水のような
涼気の中で
朝顔がひらく
君の静脈と
おなじ色で

輝く
みごとな雲の城を
あまり見あげていると
君　その中へと
さらわれてしまうよ

籐椅子で午睡する君の
その夢にも
羽黒蜻蛉がひそやかに
ひらひらと
来てとまるか

窓にもたれ
長い夕映えを眺める
君の輪郭を
ふるえる蜩（ひぐらし）の声が
奏でている

君が
両手を広げたなら
高く舞いあがる白鳥座へと
そのまま
重なってゆくよ



短歌

桐野黎

永遠を横切る果実　はつ夏の光いちまい纏った君は
この径にアガパンサスが咲くまでに培養される面影ひとつ
人波にカムパネルラが紛れてる七月の夜に刺さる鉄塔
逃げ水は春の季語　でも僕は追う夏の逃げ水きら　きら　きら
午睡する瞼の裏にゆらぐのはあの子にあげたビー玉の青
いちめんにぎらり記憶を貼りつけて真夏の空は青フォルテシモ
あの夏の風が私の身体へと縫い付けた鍵盤　鳴れよ今
その角を曲がればぐんと暗くなる蠍座ぐんと僕らに迫る
夏の真夜君と交信できるかも壊れたサテライト経由なら
青い痣隠し掲げるおそ夏のスクリーンには「メゾン・ド・ヒミコ」

俳句

星野響

打ち水をまずは己の心へと
少年は虹を吹き抜く風となり
夏正午身のうちそとのがらんどう
睡蓮に寂光土への道を問う
赤信号炎暑静寂大国道
噴水よ狂言綺語よきらめけよ
かろやかに後光としての白日傘
告解を終え帰る背と黒日傘
夏祭り赤い灯しにうるむ影
宵闇をただよう水風船数多
夏が逝く　折本を丁寧に折る

—Thank you for reading—

一人文芸倶楽部Tower117

塔野夏子（詩）
南野薔子（五行歌）
桐野黎（短歌）
星野響（俳句）

http://tower117.secret.jp
https://note.com/tower117
@Tower11710